



2016年3月23日放送

印象に残る症例②

若葉ファミリー 常盤平駅前内科クリニック 院長 原田 智浩

前回は「手足が冷える」冷え症がテーマでした。しかし冷え症は体表の冷えばかりが問題ではありません。実は冷え症には、胃腸が冷えることが課題の場合もあるのです。体表を「表」と呼ぶのに対して、胃腸を「裏」と表現すると、裏の冷え症「裏寒」が問題となるのです。

この2回目では、この「胃腸が冷える」についてお話をさせていただきます。

症例は、41歳女性、身長156cm、体重50kgです。来院の主訴は「お腹が張る」という症状です。お話を伺うと、ガスがお腹の上まであがってきて膨れてしまう、左のわき腹がきゅっと痛い時がある、お腹がグルグル鳴って恥ずかしい、朝方にゆるい便が出やすい、というものです。しきりにお腹の症状を訴えられていました。

このような方の多くは、すでに内視鏡検査を済ませています。この方も、結果として特に大きな問題がないと診断されていました。病名は、過敏性腸症候群といわれたり、機能的胃腸症といわれたり、胃腸のお薬が処方されたようです。でも効果はあまり実感できないそうです。

漢方ではお腹に触れて診察します。この方のお腹は、全体に冷たさが感じられます。でも、問題はお腹だけではなく、背中から太ももにかけて、シンシンと底冷えがある、顔から頭のとっぺんにかけて引っ張られる感じがする、眉間も重い、生理のときは腰回りが冷たい。どうやら体表の冷えも伴っているようです。底冷えしているせいでしょう

か。温かい物が大好きで、お風呂はいつも長湯なのだそうです。

最後についてに聞かせてくれたお話があります。「本当は、もう一人子供がほしくて、排卵日あたりにタイミングをあわせていますが、なかなかうまくいかない」そうです。基礎体温はやっぱりバラバラです。

この方の冷え症は、単に手足だけが冷える方と比べると慢性的であり、その分重みがあります。

お薬は、お腹全体が冷えていますので、人参湯から処方してみました。人参湯は、人参を中心に甘草、乾姜が体の裏から温めてくれます。たしかに飲んでいただくと、お腹からガスが出てきて、大分調子は良いそうです。

しかし冬になり寒い日が続いた頃、人参湯では少し効果が落ちてきました。そこで附子末をつけ足してみました。つまり人参湯加附子（附子理中湯）です。体を温める重要な生薬に、乾姜、附子がそろいました。これで寒い季節もなんとかなりそうです。

胃腸が冷える方の場合、体表の冷えが重なっていることがほとんどです。その分、手足が冷えるだけの方よりも重症の冷え症といえます。

お腹は気がめぐらなくなると、張りが強くなったり、グルグル鳴ったりします。このような方を虚弱体質、アトニー体質といいます。症状は、倦怠感、気力・集中力の低下、日中の眠気が強く、一日中寝転んで過ごす、胃下垂、朝方の下痢(にわとりが鳴く早朝におこりやすく、鶏鳴下痢という)などがあります。

ここで話が少し脱線しますが、前回紹介した黄帝内経では、中国医学を語る上で 3 つのポイントが述べられています。

- (1) 体には、表と裏がある
- (2) 表には、表上面を流れる陽経絡と表下面を流れる陰経絡があり、裏には内臓がある
- (3) 陰陽寒熱が、その経絡を交通し、全身をめぐっている

裏（内臓）から始まる冷えは、次に体表下面を流れる陰経絡に伝わり、体表上面の陽経に影響を及ぼします。つまり、胃腸で陽気が滞るとまずお腹が張ってきて、それは次第に体全体に広がって、冷えが完成してしまいます。

原因として、黄帝内経では「内因」と「不内外因」が述べられています。内因には、精神的ストレス（喜怒憂思悲恐驚）が含まれ、不内外因には飲食不摂生、労働による疲労などが含まれます。つまり悪い生活習慣です。もちろん最初から陽気の少ない体質の方もいます。

このような方に必要な生薬は、なんといっても「乾姜」と「附子」です。いずれも陽気を増やして裏寒をとる作用があります。この二つの生薬に甘草が加わると、甘草・乾姜・附子のトリオになり四逆湯というお薬になります。これはとても冷えている方のお薬です。しかしこれはエキス剤では用意されていないので、その前に甘草・乾姜のペアとして甘草乾姜湯を、乾姜・附子のペアとして乾姜附子湯を基本に考えます。

まず甘草-乾姜は、人参湯の重要構成生薬です。これはしっかり体の奥底から温める作用があります。ここから派生して、大建中湯や苓姜朮甘湯などの冷えのお薬もできあがります。乾姜-附子は、真武湯で、乾姜が乾生姜に変わり、その方意が活かされています。また甘草-乾姜-附子の四逆湯の方意は、人参湯加附子（附子理中湯）によって生かすことができます。これらのお薬を考慮することは、体の奥から冷える方の治療として、有意義と言えます。

ところで、冷えてお腹が痛くなる現象があります。漢方ではこれを「寒疝（かんせん）」と言い、西洋医学的では手をつけにくい病態といえます。これも人参湯、人参湯加附子(附子理中湯)、大建中湯で、すなわち甘草-乾姜-附子で対処できるのです。

内臓も冷えて体表も冷える方、つまり表裏寒証の治療は、裏を優先的に治療することが大切です。裏を充実させると、その後ゆっくり体全体を温めるよう導けるのです。